

## 会津の歴史シリーズ



## 第5回 会津の歴史④ (加藤時代)

湯田 祥子 (ゆだ さちこ)

若松城天守閣郷土博物館  
学芸員



### ◆水軍の将・加藤嘉明

蒲生家の断絶のあとをうけて会津に移封してきたのが、水軍を率いて武功を挙げてきた加藤嘉明である。嘉明は、生まれは三河国（現在の愛知県）といわれている。その後、滋賀県のあたりに一族で移り住み、やがて、頭角を現しつつあった豊臣秀吉に見出され仕えることになった。織田信長亡き後に秀吉と柴田勝家が覇権を争った賤ヶ岳の戦いでは、戦功のあった「七本槍」に数えられ、また、築城の名手としても名高い。会津に移ってくる前に治めていた松山では、名城松山城を築いている。といっても、松山城は築城開始から完成まで実に20年以上の長い年月を要しているの、残念ながら嘉明は自らが手がけた城の完成を見ることなく会津に移ってくるようになった。自分が心血を注いで築いた城の完璧な姿を見られなかったことは、幕府の命には従わざるを得ないとはいえ、大層心残りだっただろう。

話をもとに戻すが、嘉明は水軍を率いる将として功を挙げていた人物である。秀吉によって文

禄・慶長と二度にわたって行われた朝鮮出兵では、絶体絶命の危機に陥った加藤清正の援軍にかけつけ、結果その命を救い日本側の勝利に貢献した。いわば海とともにあった武将としての嘉明の来し方だった。それが、前任地松山から石高が倍となる40万石で、奥羽の要衝の地である会津を任せられたとはいえ、それまでとは勝手の違う山国という土地を経営していくのは容易ではないと感じられただろう。加えて、会津移封を命じられた1627年にはすでに65歳という高齢である。できれば断りたい「出世」だったと想像できる。しかし世の中が定まらない時期ならいざ知らず、時はすでに徳川幕府が開かれて20年以上も過ぎ、1614年・15年に起こった大坂の陣を経て徳川の支配力が全国の隅々までいきわたっている時代であり、嘉明も幕府の命令には従わざるを得なかった。

余談だが、この嘉明の望まない移封に関して、もとは藤堂高虎が任命されるはずだったところを、高虎が固辞し嘉明を推挙したため嘉明に決定したとする話がある。嘉明と高虎は水軍の将とし



加藤嘉明が築いた松山城

て、また城作りの名手として、共通する点もあり、ともに戦国の世を戦い抜いてきたライバルである。その二人の間でどのような思惑があり高虎の嘉明推挙につながったのか、今となっては真実はわからないが、ともあれ1627年5月、嘉明は嫡子・あきなり明成とともに会津入りを果たした。

#### ◆加藤家による会津支配

嘉明は会津入り後、まず領内の整備に力を入れている。この頃会津から江戸に向かう正規の街道は白河街道だったが、蒲生氏郷がもうじさとが若松城下を作り上げたときに城の入り口を東の方角に向けて開いていたため、城下から伸びる白河街道は険しい山道が続く背あぶり峠を越えなければならなかった。そこで嘉明は、背あぶり峠から北東側を通る滝沢峠を越える新しい道を整備した。ちなみに、嘉明の跡を継いだ明成の時代になると白河街道はさらに整備され、滝沢峠には石が敷き詰められるなどして、以後の人や物流の利便性は飛躍的に高まったと考えられるので、これは加藤時代の大きな功績の一つと評価されている。

また、1611年に起きた大地震で被害を受けていた鶴ヶ城を改修しているところも加藤時代の大き

な功績の一つである。ただし、加藤時代といっても1631年に嘉明は亡くなっているため、城の改修を主に取り仕切ったのは嘉明の跡を継いだ明成であるが、この時の改修のおかげで、鶴ヶ城は現在見られるような姿となったのである。

改修のポイントとしては、①東を向いていた正門（大手）が北向きになる②西・北の馬出が出丸となる③天守が7層から5層につくりかえられる、というのが代表的なところだろう。全体として防御面に力を入れた改修である。このおかげで、後の戊辰戦争の時には1ヵ月の籠城戦に耐え抜き、最後まで落城することは無かった。ちなみに鶴ヶ城の天守閣だが、蒲生氏郷が築いた際には当時主流の黒塗りの下見板張りしたみいたばだったところが、明成の改修の時には白い漆喰壁しっくいかべのものに変わったと考えられている。

このように、加藤嘉明・明成父子が会津を治めてから残した足跡は決して小さいものではなかった。しかし、現在その功績はあまり評価されていないように見える。いったい何故か。実は、加藤家による会津支配の幕切れをめぐるスキャンダラスな事件が大きく関連しているのである。

## ◆一人の家臣が引き金となった加藤家支配の終焉

1639年の春、加藤家の家中に激震がはしる大事件が起こった。家老職にあり鶴ヶ城の重要な支城である猪苗代城代もつとめたことのある堀主水ほりもんどが、城に向かって発砲したうえ一族郎党を引き連れ会津から去っていったのである。これは当時の武士達にとっては重罪であり大変な事件だった。当時の加藤家当主である明成は、この事件を解決するためには会津40万石の領地を返上してもかまわない、と幕府に願い出たほどである。

ではこの大事件の要因はなんだったのか。主水は嘉明のこしょうやく小姓役をつとめ、大坂の陣では嘉明の命を救う大きな働きをみせて、嘉明から金の采配を授けられた人物である。その後も嘉明に重用され、加藤家の重要な家臣となっていた。それは、嘉明が亡くなり明成の時代になってからも変わることがなかった。しかし、次第に新しい当主と古株の重臣の関係は悪化していき、事件に発展していくこととなった。

この事件はスキャンダラスな内容のためか文学作品などでもいくつか取り上げられているが、それらに共通しているのは当主明成がいわゆる愚かな殿様だったため、家臣である主水が正しいことを貫くために立ち上がる、という描かれ方をしていることである。しかし、事実が本当にそうだっ

たのか、小説と事実は往々にして異なる。明成にしてみれば先代からの重臣ということで隠することなく物申してくる家臣などは疎ましかっただろうし、主水にしてみれば共に戦場をくぐり抜けてきた先代の嘉明と比べると明成はまだまだ頼りない主君だったことだろう。ある意味仕方の無い対立だったのかもしれない。

事件の顛末としては、会津を出奔しゅっぽんした堀主水は明成の悪政を幕府に訴え出たが聞き入れられず、主水らは明成に引き渡され処刑された。一方、先の明成の言葉の通りに会津の領地は幕府に返上されることになる。これは正確には今回の事件だけが問題となったわけではなく、その他様々な要因が複合的に合わさった結果なのだが、ともあれ加藤家は明成の子・あきとも明友にその跡を継がせ、石見国1万石へと減封げんぼうされることになった。やがて加藤家は近江国水口に2万石をあたえられ、そのまま幕末まで続いている。

大げさに言えば、主従間の争いがひとつの国(藩)を崩壊させてしまったわけだが、これだけの大事件が起こったならばお家取り潰しとなっても不思議ではないところを、大幅な減封とはいえ存続をゆるされたのは、おそらく嘉明の徳川家康や秀忠への忠節が考慮されたからだろう。こうして加藤家が会津から去り、かわりに山形・最上からほしなまさゆき保科正之がにゅうほう入封することになる。



改修され新たにもうけられた防御の拠点・北出丸の石垣